

岡山-voice

● VOICE

● 特集……「スーパーグローバル大学」に向けて
岡山大学の教育改革「学びの強化」～60分授業・フオーター制導入～

● 知ってますか？

● コーヒーブレイク

● シリーズ…… 卒業生メッセージ

● 投稿

No.

17

2015



● Junko Fukutake Terrace (通称：J テラス)

設計：建築家／妹島和世 氏、西沢立衛 氏によるユニット「SANAA (サナア)」

目次

VOICE

- 大学のグローバル化をサポートするグローバル・パートナーズ
グローバル・パートナーズ センター長 荒木 勝（理事・副学長） 1

特 集

- 「スーパーグローバル大学」に向けて
理事・副学長（大学改革担当） 谷口 秀夫 5
- 岡山大学の教育改革「学びの強化」～ 60 分授業・クォーター制導入～
高等教育開発推進機構副機構長 松川 昭博（学長補佐・大学改革担当） 8

知ってますか？

- 『岡山大学は敷地内全面禁煙です』
保健管理センター長 小倉 俊郎 13

コーヒーブレイク

- おしゃれな交流の場・Jテラス
総務・企画部総務課 笠原 秀起 15

シリーズ 卒業生メッセージ

- 留学のすすめ
岡山県立美術館
大学院文化科学研究科 博士後期課程 人間社会文化学専攻
橋村 直樹（2010 年 3 月修了） 16
- 自分の未来考えつつ、充実した毎日を
日本銀行岡山支店
法学部法学科 近藤 彩和子（2011 年 3 月卒業） 17

投 稿

- 海外の大学紹介
海外に学び、それから働いて学んだ二十年
大学院社会文化科学研究科（文学部）准教授 田中 秀和 18

編集後記 21

（注）役職等は、平成 27 年 3 月 1 日現在のものです。

大学のグローバル化をサポートする グローバル・パートナーズ



グローバル・パートナーズ
センター長 荒木 勝 (理事・副学長)



岡山大学 グローバル・パートナーズ

グローバル・パートナーズ（旧国際センター）は、大学のグローバル化を推進し、岡山大学の学生と教員が世界で活躍できるようサポートする組織です。具体的には、海外大学・研究機関との学術協定締結、留学生・外国人研究者の受入れ、本学学生の長期・短期海外派遣、本学学生のグローバル教育、外国語による留学生教育、大学院・学部、および種々の全学センターの国際教育活動のサポート、研究者受入れ・派遣のサポート、留学生の生活サポート、様々なグローバル教育プログラムの推進、国際同窓会のサポート、国内他大学との国際連携活動へのサポートなどを行なっています。

2014年、岡山大学がスーパーグローバル大学に採択されたことで、グローバル・パートナーズの責任と役割はますます大きくなりました。10人の専任教員と約30人の専門スタッフが、21世紀の世界に羽ばたく学生を育成するため、また世界レベルの研究交流をサポートするため、日々業務に取り組んでいます。

1. 留学生・研究者受入れ支援

グローバル・パートナーズは、世界から岡山大学に集まってくる学生や研究者・教員にとって最初の窓口です。サポート部門（SISS）では、専門スタッフがビザ申請のサポート、宿泊・滞在のサポート、生活サポート、生活オリエンテーションを一元的に行なっています（ワンストップ・サービス）。留学生、研究者が岡山到着初日からスムーズに研究、生活を立ち上げられる環境を作ることは、グローバル・パートナーズの大切な役割です。



グローバル・パートナーズ事務室

現在、短期滞在も含めると、年間約 700 人の留学生在が岡山大学を訪れます。アジア、北米、南米、欧州、中東、アフリカ、オセアニアの 30 か国以上から集まっており、これら地域の多彩さが岡山大学の特徴でもあります。これらの留学生を中心に、岡山大学のキャンパス自体がグローバルな交流の場となり、多様な価値観が交差し、刺激し合う場になるよう、グローバル・パートナーズではさまざまな交流事業を企画したり、留学生を取り込んだ授業を進めています。

2. 学生海外派遣支援

一方で、グローバル・パートナーズでは、日本人学生の海外派遣にも力を入れています。岡山大学短期留学プログラム（EPOK）では、毎年多くの学生が世界約 30 校の大学に留学しています。



EPOK による留学プログラム

1 か月の英語語学留学（サマースクール、スプリングスクール）では、イギリス、カナダ、オーストラリアなどのコースが人気です。

このほか、全学から 50 人（2015 年度からは 100 人）を選抜して特別指導を行なうグローバル人材育成特別コースの学生に対する留学サポート、海外インターンシップ開発、中国東北地域大学との交換留学・単位互換制度である O-NECUS、日中韓共通教育プログラムであるキャンパス・アジア、フランスのエコール・サントラル・パリ校を中心とした EU の有力校に博士後期課程の学生を派遣するエラスム

ス・ムンドゥス EASED プログラム、その他、各局独自のプログラムなど、多様な派遣プログラムをグローバル・パートナーズはサポートしています。



留学中のグローバル人材育成特別コース生

3. 英語による現代日本学講義

グローバル・パートナーズでは、留学生のために英語による講義を提供しています。留学生は、日本語を学んだり専門分野の教科を履修したりできるほか、「現代日本学」を通じて現代日本についての理解を深めることができます。

この講義群では、現代日本を政治学、社会学、言語文化学、文化人類学、文化論などの様々な視点から学べるだけでなく、茶道の講義と実技を通じた日本文化の体験的学習、地域文化演習を通じた日本の地域社会とのふれあいなど、アクティブ・ラーニングを通じた魅力的な講義が提供されています。



「日本文化と礼法：茶の道と精神」の講義風景

4. 大学院予備教育特別コース

大学院予備教育特別コースは、大学院をめざす留学生のため、グローバル・パートナーズが半年、または1年間予備的指導を行なうコースです。



大学院予備教育特別コースの教員と学生

岡山大学は、2013年に文部科学省から「研究大学」に指定されたことに伴い、世界レベルの研究大学をめざして大学院教育を強化しています。その一環として、海外の優秀な学生を積極的に大学院で受け入れています。しかしながら、留学生が希望する専門分野とのマッチングがうまくいかなかったり、学術日本語が大学院のレベルに達しない場合があります。このような学生に対し、グローバル・パートナーズが日本語・日本文化に関する基礎的な学力の養成の他に、アカデミック・ライティング、研究の方法などを指導し、また大学院の教員を副指導教員、アカデミック・アドバイザーにつけて、大学院受験まで徹底指導します。

このコースと並行して、短期留学プログラム（3＋1）を設置しています。これは、外国の大学で日本語を学ぶ学生が、半年、または1年間岡山大学で実践的に日本語を学び一般の講義を履修するプログラムです。ここからも、将来の大学院生が育っていきます。

5. 大学の世界展開力強化事業 (キャンパス・アジア中核拠点形成支援)

キャンパス・アジア事業は、日中韓の「共通善」（個人と社会の幸福を同時に実現する思想）をキーワードに、様々な分野で学ぶ3国の学生が東アジア全体の利益を実現するために研究、学習するプログラムです。

3国の学生が、長・短期で相互に留学し、専門を深めながら東アジアの伝統、思想、歴史、現代社会について議論を通じて学び合うプログラムが数多く用意されています。

このプログラムでは、実際に地域の抱える課題や解決策についても実地で学びます。コンビナート視察と公害問題の討論、町並み保存と快適な生活環境の維持、中核都市整備と少子高齢化社会への対応など、共通の課題を3国の学生がさまざまな言語を用いて討論します。



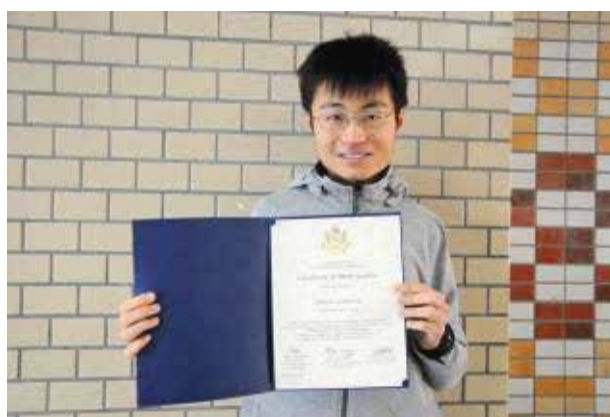
キャンパス・アジア学生の討論・プレゼン
日本語、中国語、韓国語、英語が飛び交う

こうした授業を通じ、将来多国籍のチームでプロジェクトを実現するとき、それをリードできる資質を養います。学生は学期末に開催するキャンパス・アジア学生フォーラムにおいて、留学中に学んだ成果報告を行ない、東アジアの共通善を実現させるために若者が果たすべき役割について意見をまとめます。

6. リエゾン・オフィス

大学院、学部のグローバル教育、国際的研究、さまざまな国際プログラムをサポートするため、リエゾン・オフィスが設置されています。これは、国際交流協定、学生の海外でのプログラム構築、ビザの取得、国際共同研究の立ち上げなど、専門知識や経験が要求される分野で、的確に大学院、学部のプログラムをサポートするため、グローバル・パートナーズと大学院、学部の橋渡しをするセクションです。グローバル・パートナーズの経験と蓄積を大学全体の財産として共有し、効果的、効率的に国際協力を進めていく仕組みです。学部学生の留学相談もサポートします。

7. その他の活動



大阪・神戸アメリカ総領事主催の
英語スピーチコンテスト入賞者

グローバル・パートナーズでは、学生のグローバルな活動を支援しています。こうした活動の成果として、JICA プロジェクトでの海外研修、OECD の学生大使としての広報活動、さまざまなコンクールでの受賞と、学生の積極的でユニークな活動をあげることができます。

また、留学コーディネーター配置事業（ミャンマー）など、新興諸国の教育活動を積極的に支援しています。



荒木センター長（前列右から2番目）とスタッフ

「スーパーグローバル大学」に向けて

理事・副学長（大学改革担当） 谷口 秀夫

昨年9月、世界レベルの研究を行なう大学や国際化を進める大学を支援する、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業に岡山大学の構想が採択されました。今後10年間で、地域、そして日本のグローバル化を牽引する大学として教育改革を進め、世界に存在感を示す大学になることをめざします。

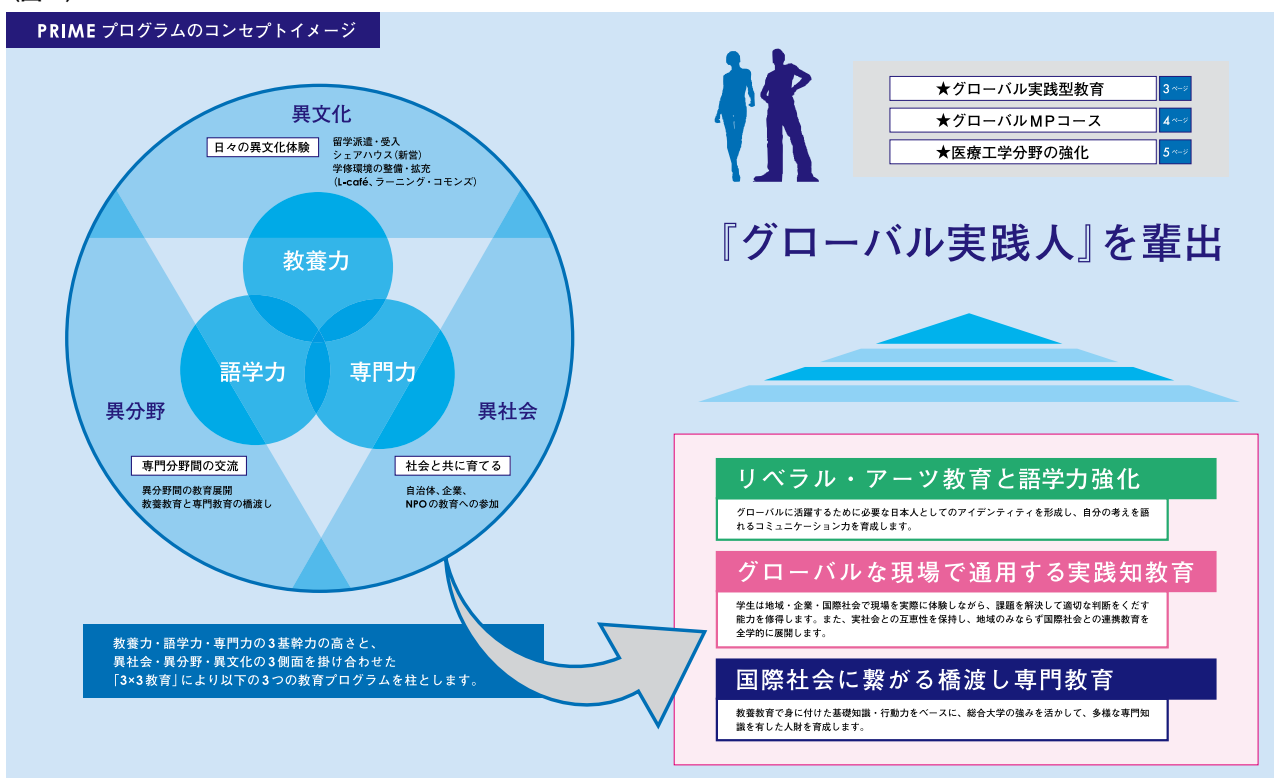
1. どのような学生を育てるのか

岡山大学の構想「PRIME プログラム～世界で活躍できる『実践人』を育成する！～」では、語学力強化や地域でのフィールドワークを含む実践型教育を通じて、社会に役立つ「実践人」を育成することをめざしています。「実践人」とは、現場で適切な判断を下すことができる能力（実践知）を持つ人のことです。岡山大学は、11学部、大学院7研究科を有する総合大学としての特長を生かし、さまざまな分野で国内外の実社会で活躍できる学生を育てて

いきたいと考えています。

このプログラムのコンセプトを表したのが、下の図1です。このうち、岡山大学が考える「リベラル・アーツ教育」とは、①幅広い豊かな知性と感性 ②社会を変革する創造的で自由な発想力 ③バランスのとれた寛容な社会倫理 の3つの力を育成する教育です。これらを、異なる学部にも所属する学生同士が交流し、地域や世界の現場で実践を重ねることで身につけていきます。

（図1）



また、「橋渡し専門教育」とは、教養教育と専門教育とが分断されているのではなく、多様な専門知識を身につける土台として教養教育を位置づけ、専門教育への橋渡しを行なうという意味です。

「橋渡し」には、学生が専門分野間を双方向に交流し、移動ができるキャリアパスを設置するという意味も含んでいます。

2. 特徴的な教育プログラム

「実践人」を育てるため、岡山大学では今後、主に三つのプログラムを準備していきます。

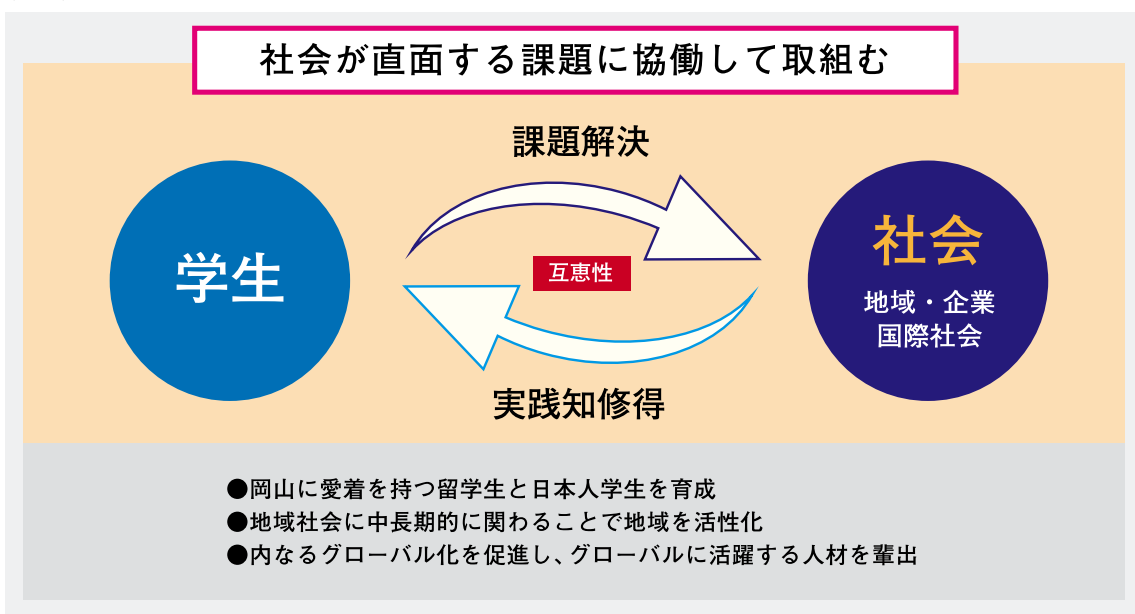
一つ目は現場体験を通じた「グローバル実践型教育」です。地元企業や海外で実践を行なう「グローバル実践型教育科目」を全学体制で実施していきます。具体的には、留学生と日本人学生が学部横断でチームを組み、地域や世界の歴史・文化・産業を共に学び、座学で得た知識をもとに自ら考え、社会の現場に出て実践していく教育科目を設定する予定です。社会が直面する課題に大学と社会が協働して取り組むことで、学生はグローバルな視点で課題解決ができるグローバル実践知を修得し、社会は課題を解決する、いわば「互恵性」をめざしています(図2)。

二つ目は、日本人学生と外国人留学生がともに学ぶ「グローバルマッチングプログラムコース」です。

学生が自ら設定する課題に応じ、学部・学科横断型の履修プログラムにより学習できる現在のマッチングプログラムコースを拡充します(平成35年には日本人100人、外国人留学生150人に拡充)。文系・理系それぞれに英語学位取得コースを設定し、1年生から徹底した語学教育を実施します。英語と日本語による教育を行ない、留学生と日本人がともに学ぶ混合ゼミを開講します。また、日本人、留学生ともに海外を含めた長期インターンシップによる異社会・異文化での学びを行ないます。これらにより、将来的に国際舞台で活躍できる人材の育成をめざします(図3)。

三つ目は「医療工学分野の強化」です。社会の高齢化が進む現代において、介護、医療や福祉の分野では、患者のQOL向上を可能にする新しい医療機器、診断治療技術、創薬開発技術の研究開発をリードできる人材が必要不可欠となっています。そうした人材を育成するため、医学・工学の異分野融合研究をベースとした「生命医用工学専攻」を平成27年に設置します。平成30年には全ての研究科を再編し、「国際医療生体工学研究科」を設置予定です。また、海外提携大学病院との連携をさらに強化し、国際的な医療工学研究を展開する予定です(図4)。

(図2) グローバル実践型教育

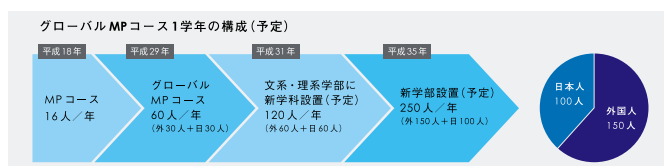
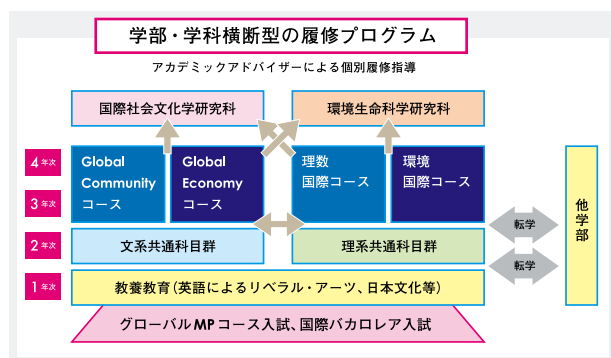


3. グローバル化が進む中、岡山大学の学生には「得意力」を身につけてほしい

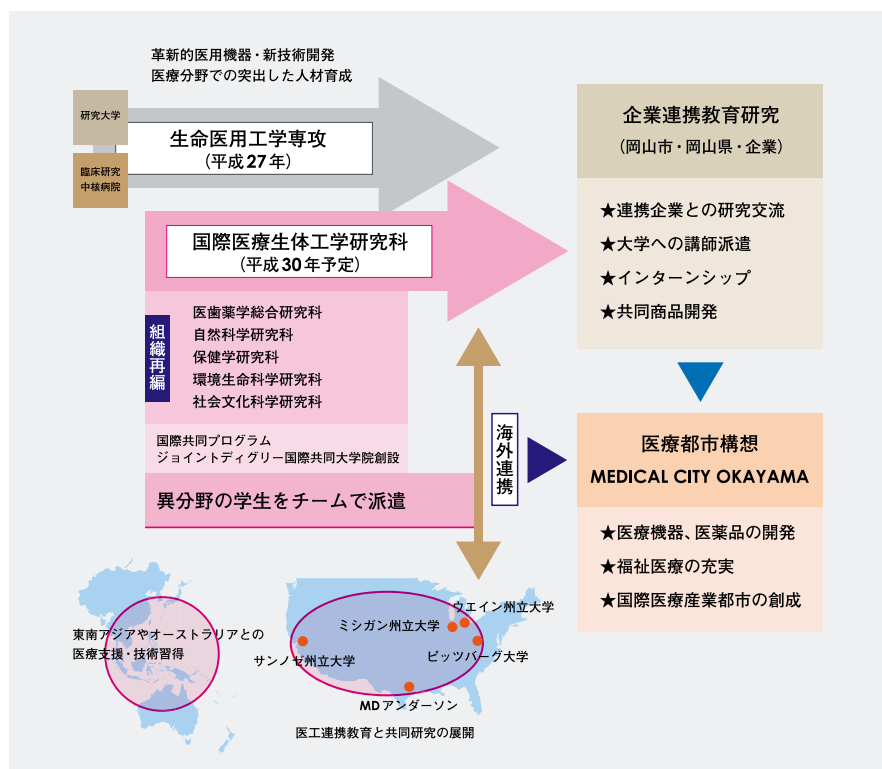
グローバル化においては英語ができればよいという考えもあります。しかし、まず、母国語（日本語）で思考を整理し、表現する能力を身につけなければなりません。また、異なる価値観をもった他者に自分の考えを説明し、納得してもらうためには、世の中にはさまざまな価値判断があることを学ばなければなりません。さらに、自分の強み、自信となる部

分を知ること大切です。それには、自分の優れた点を発見し、伸ばす「得意力」を育てることが必要です。他の人より秀でた部分があれば「自信」が生まれます。それを意識することで、自分が今何をすべきか、今後どう世の中に貢献すべきかが見えてくるはずです。岡山大学が今後展開する教育プログラムを通じて、岡山大学の学生には、自分の「得意力」を身につけてほしいと考えています。

(図3) グローバルマッチングプログラムコース



(図4) 医療工学分野の強化



岡山大学の教育改革「学びの強化」 ～60分授業・クォーター制導入～

高等教育開発推進機構副機構長

松川 昭博（学長補佐・大学改革担当）

岡山大学は、平成 28 年度から教育の一大転換として、全学の学士課程（学部学生対象）において、授業の 60 分制及びクォーター制（4 学期授業）を導入することとして、現在、カリキュラム、学事暦、授業の方法等について検討しています。これらの取組みは、学生の習学時間の確保、学生の留学機会の増大、長期インターンシップの実現、入学から卒業までの教育の体系的再構築など、日本中の大学に対して社会が長年求めてきた大学教育の課題を岡山大学が正面から受け止め実現していこうとするものです。60 分授業により、単位の実質化を図り、アウトカムに重点をおく教育体制を確立し、クォーター制導入により国際通用性を持った学修体制に転換します。

1. これまでの経緯

岡山大学は、これまでも、学生のみなさんが勉学に励み、卒業後に社会で活躍できるよう、「岡山大学ディプロマポリシー」のもと 5 つの学士力を定義し、授業計画（シラバス）を充実させ、成績評価基準を明示し、「Q-cum システム」を導入してディプロマポリシーに定める学士力の達成度を可視化してきました。また、グローバル人材育成のためのソーシャルラーニング・スペース「L-café」（多言語カフェ）を設置し、図書館の整備等、学修環境の改善に取り組んできました。こうした取組みは着実に成果を挙げてきましたが、社会の大学教育に対する切実な要請に応えるためには、一層踏み込んだ改革が必要となっています。平成 25 年 10 月から大学改革プロジェクトチームを立ち上げ、役員会議、部局長等合宿、教育研究評議会メンバーによる“Build & Renovate 会議”等で議論を重ね、その結果は「岡山大学改革プラン」として策定されました。教育改革としては、すでに取り組んでいる Q-cum システムと科目ナンバリングに加え、60 分授業・クォーター制導入を柱とした「学びの構造化」を実現することになりました。

2. 60 分授業の導入

60 分授業制は「学びの強化」を目的とするものです。専門領域で学ぶべき内容はますます増加し、同時に幅広い教養、汎用的技能、実社会の現場体験等を通じて創造的・主導的に課題を解決できる力を育成することが求められています。一方、大学生の自習時間は低いレベルに留まっています。岡山大学は、これまでの 90 分 1 コマを 60 分 2 コマに変更し、まず大学で学ぶ時間を確保します。授業時間の短縮により、学生の授業への集中力を持続させます。

60 分授業化は、現状の講義内容をそのまま詰め込むことではありません。学生の思考力を十分に引き出せない一方向主体の授業をアクティブラーニング（学生参加型、課題解決型授業）に切り替え、従来の知識偏重の受け身教育から学生の能動的な学びに転換し、「何を獲得したか」に重点をおくアウトカム重視の教育体制に転換します。60 分 1 コマの授業にして、授業の内容、授業のスタイルを充実し、いろいろなスタイルの授業を展開して、学ぶ姿勢、学ぶ力、考える力を伸ばします。e-Learning システム（Web class）等を活用して、事前に授業内容を示して予習前提で授業に入り、課題を与えて復習

させる PDCA サイクルでの授業づくりを活性化します。これにより学生は「自ら勉強する」習慣を身につけることになります。60分授業への移行に伴い、90分を単位制度上2時間とみなしている現状を改め、60分を1時間の授業とする単位の実質化

を行ない、授業内容の改善と併せて「教育の実質化」を実践します。可能な範囲で部局としての卒業要件単位の見直し、単位構造の柔軟化、複数教員による科目の設定等も検討します。



3. クォーター制の導入

学事暦を柔軟化し、学生の派遣、外国人留学生の受入れを容易にするため、現行の2セメスター制からクォーター制に移行します。8週×4を基本とし、可能な限り必修科目を設定しないクォーターを設け、夏季、春季の休暇期間と合わせて留学を促進します。入学と卒業の機会を増やし、外国人留学生の受入れをより柔軟に行ないます。留学生が増えることにより、学生は異社会、異文化に触れ、新しい

価値観を発見し、グローバルな感覚を醸成できます。クォーター制導入は、留学に役立つだけではありません。1年間を4学期に分けることで、短期間で集中的に学ぶことが可能になりますし、よりこまめに学習状況が確認できます。柔軟な履修計画で学習状況に合わせた受講ができ、1クォーターと休業期間を利用して長期間のインターンシップやボランティア課外活動等の多様な学外活動にチャレンジできます。



4. 60分授業・クォーター制に伴う社会連携・実践知教育

60分授業・クォーター制導入を契機に、新しいタイプの授業が始まります。これまでの机の上での勉強だけではなく、学生同士や学生と教員とのコミュニケーションを重視する授業を増やし、問題解決力、仮説構築力など論理思考力を鍛えるためのトレーニングを行ないます。さらに、キャンパスから外に出て、地域・企業現場の課題解決プロジェクトに参画し、社会とともに学ぶ授業を行ないます。実社会と連携して、現場で通用する実践知を養う実践・社会連携型授業を始めます。同時に教育方法・指導の改善を進めます。授業は何のためにあるのか、何をどのように学んでもらうか、学ぶ力・考える力をどのようにつけてもらうかを念頭に、学生が何を身につけたかに重点をおくアウトカム重視の教育を行ないます。教員も学び続けることで、大学の教育そのものが変わっていきます。新しい教育体制の導入により、教育課程の体系化が可能となり、国際通用性を持った学修体制が構築できます。学士教育課程の抜本的再構築を行ない、「鍛え抜かれた学生」を社会に送り出します。

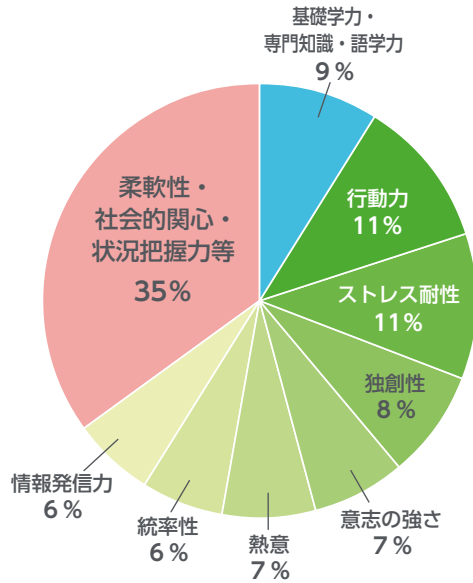


5. 社会の求める人材の輩出

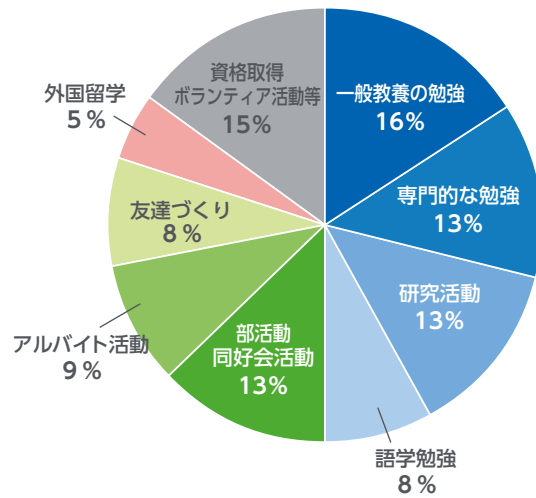
大学は、輩出する人材の質を社会に対して保証しなければなりません。岡山大学が教育改革「学びの強化」を平成28年度から実施するにあたり、その取組みが社会のニーズにしっかりと適合するものであることをめざして、卒業生の多くが就職先として選択する官公庁・企業等（以下「企業等」）にアンケート調査を行ないました。

企業等は、現在の大学生に対しては、「自ら行動しようとする態度が不足し、プレッシャーに弱い。柔軟性に欠け、社会に感心が薄い。もっと情熱がほしい」と考えています。企業はさらに、「在学中にしっかりと学業の研鑽を行ない、学生時代にしかできない経験も積んでほしい」と願っています。文系大学生には、「知識や能力をまとめる力、一般教養知識、問題を発見する力、分析・考察する力、知識を活かす力」を求めています。理系学生には、「プレゼンテーション能力、専門領域の知識、分析・考察する力、問題を発見する力、知識を活かす力」を求めています。

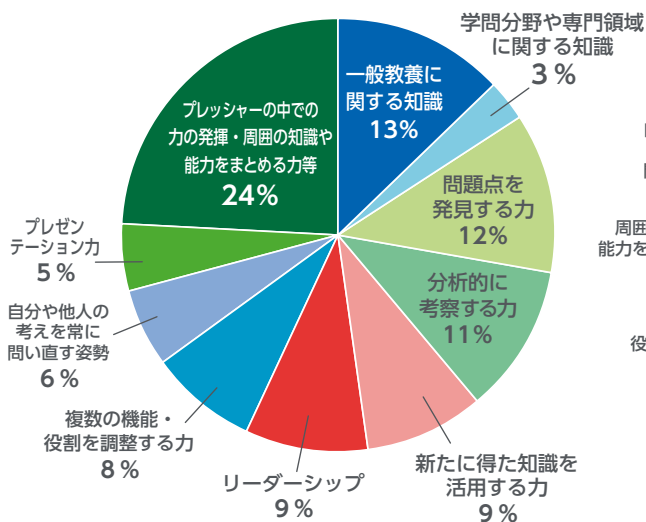
大学生の能力や態度に不満な点



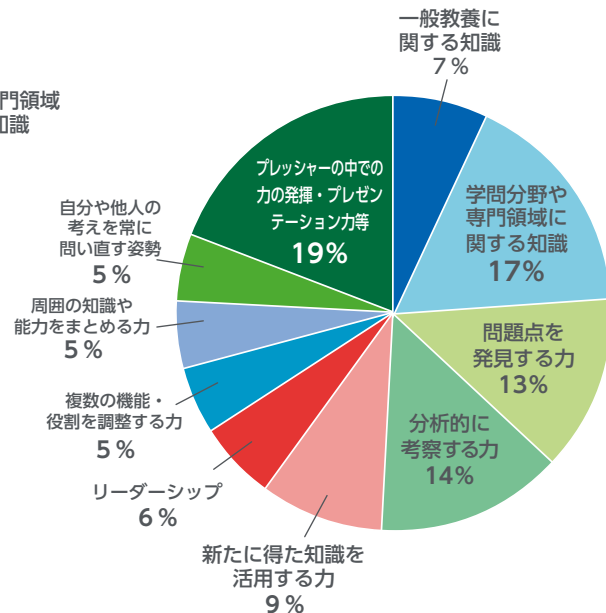
大学在学中に経験して欲しいこと



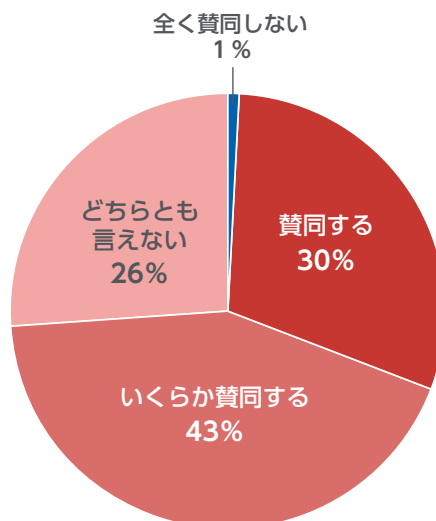
文系学生に身につけて欲しいこと



理系学生に身につけて欲しいこと



岡山大学の教育改革に賛同しますか



大学教育には、「グループディスカッション、ディベートの体験、身近な課題解決、プレゼンテーション」といった、社会人として必要な活動を意識した授業方法を取り入れることを提言しています。

卒業生の多くが就職先として選択する企業等からの提言は、岡山大学の教育改革の考え方とマッチしています。岡山大学の教育改革の取り組みへの賛否について、「賛同する」「いくらか賛同する」「どちらとも言えない」「あまり賛同しない」「全く賛同しない」の5段階で選択してもらいました。回答の概要は以下のとおりです。

「賛同する」：集中力の持続、学習時間確保の増大による習学効果の向上、国際化の推進を期待する。

「いくらか賛同する」：改革に賛同する。運用面でのケアが必要である。

「どちらともいえない」：改革の主旨に賛同するが、授業内容の改善、教員の意識改革が伴わなければ意味がない。学生、教職員の負担等について考慮する必要がある。

「全く賛同しない」：90分が持たない者はそもそも大学進学すべきでない。

「どちらともいえない」という回答例を含め、大部分の企業等から教育改革への賛同をいただいています。

6. 求められる人材輩出のための教育改革

大学は高等教育・研究機関として「知を創成し、継承する」役割を担っています。社会を先導する知とは、時空を超えた普遍的価値に基づくものでなければなりません。その意味では、必ずしも時々の社会的風潮に迎合する必要はありません。しかし一方で、現代の大学は一般化・大衆化し、人材育成の対象も変化しています。社会からの理解と支援がなければ、高等教育・研究組織として成立しません。したがって、私たちはこの普遍的価値と社会ニーズの要素を主体的にとらえて活動する必要があります。

「日本の大学は世界に通用する人材や企業、社会が求める人材を育てているか」との新聞社の世論調査では、実に6割を超える国民が否定的な回答をしています。岡山大学の卒業生が就職する多くの企業等が求めるのは、①予想困難な時代の「正解のない問題」を最善の方向へ導く力、②学ぶ力、考える力、判断する力、③社会を生き抜く力、です。我が国は、急速な少子高齢化の進行、地域コミュニティーの衰退、グローバル化による経済や文化のボーダレス化、など重要な課題を抱えています。社会は想像以上に過酷な競争時代に突入しています。教育は国力です。日本が未来へ前進するためには、大学の教育改革はまったなしの状況です。岡山大学は、教育改革を信念と覚悟をもって進めていきます。同時に、みなさん（学生、教職員）の意見を聞き、適切な対応と丁寧な説明を果たしていきます。答えのない世界で物事を考え、知識を実行に変える力を養う教育を行なうためには、授業体制の改革と国際化の推進が不可欠です。60分授業制・クォーター制の導入は、どんな時代にも対応できる人材を育てるための教育改革です。みなさんも、変化する社会の現実を理解し、自らを高めるために主体的に取り組んでくださるよう、お願いいたします。

『岡山大学は敷地内全面禁煙です』

保健管理センター長 小倉 俊郎

岡山大学は平成 26 年 4 月 1 日から、敷地内全面禁煙となり、大学内ではタバコが吸えません。なぜそうなったか？ここに至るまでの過程とその意味について皆さんに知っていただき、ご協力をお願いしたいと思います。

どうかキャンパス禁煙にご協力をお願いいたします！



のんすもうくん
(岡大禁煙キャラクター)

● 敷地内全面禁煙までの道のり

表 1 に岡山大学で現在までに行なわれてきたタバコ対策に関係する主要事項を記載しています。平成 14 年に国が健康増進法の中で、受動喫煙防止（非喫煙者が喫煙者のタバコの煙によってこうむる健康障害を防ぐ）を明記しました。この法律を受けて、岡山大学でも今日まで種々の対策をとってきており、平成 20 年頃から、安全衛生委員会（大学の中の安全や衛生について検討する会）を中心に受動喫煙防止の方法として「敷地内全面禁煙を選ぶか」「分煙を強化するか」という議論が進められてきました。平成 22 年に厚生労働省は事業主（大学で言えば学長）に対し、労働者（大学の場合は職員・学生）を受動喫煙による健康被害から守るための対策を明確にするよう指導がありました。岡山大学では受動喫煙防止に関わるワーキンググループを設置し、種々

表 1. 岡山大学が敷地内全面禁煙に至る過程

平成 14 年 8 月	健康増進法が制定され、第 25 条には受動喫煙防止が明記される。
平成 15 年 4 月 9 月	厚生労働省より受動喫煙防止対策について文部科学省から受動喫煙防止対策及び喫煙防止教育の推進の通知。 「岡山大学における受動喫煙防止のための指針」が学長裁定された。 ⇒建物内禁煙（建物外でも指定場所以外は禁煙）、禁煙防止教育、禁煙支援
平成 16 年 4 月	病院・医療系学部の敷地内禁煙にともない県田地区敷地内全面禁煙開始。
平成 22 年 2 月 7 月	厚生労働省での受動喫煙防止対策強化に際して津島地区安全衛生委員会における受動喫煙防止対策の新たな検討に關する意見が得られる。 津島地区安全衛生委員会に「受動喫煙防止対策WG」が設置され、答申案を提出、構成部局へ本答申案の内容の検討を依頼。
平成 23 年 1 月 2 月 4 月 6 月 7 月	各部署から検討した意見を元に、提言書の修正案を審議し了承。 役員政策会議に提出・了承。 新執行部が開始。 新執行部役員政策会議にて受動喫煙防止のための指針が決議。 学長裁定で「受動喫煙防止のための指針」が改訂され、同年 10 月より施行決定。 ⇒3 年後に敷地内全面禁煙を行う。その間に喫煙所を徐々に削減する。
平成 26 年 4 月	敷地内全面禁煙実施。

の議論の中で受動喫煙防止のための提言書を作成して、執行部に提出し、それを受け平成 23 年 7 月に学長から受動喫煙防止のための指針が示されました。この指針は、約 3 年の経過措置を設けたうえで、徐々に喫煙場所を削減し、現在の敷地内全面禁煙への移行を行なうというものです。その過程は決して平坦なものではなく、ワーキンググループ、安全衛生委員会、各部局においても数多くの意見が噴出し、議論されてきましたが、岡山大学は最終的に敷地内全面禁煙を選択し、平成 26 年 4 月 1 日から実施されることになりました。

● なぜ敷地内全面禁煙なのか？

なぜ敷地内全面禁煙にしなければならないのでしょうか？喫煙する場所を作ってきちんと分煙し、受動喫煙さえ防止できればいいのではないかとこの考え方もあります。図 1 は岡山大学男子学生の喫煙率の推移です。平成 3 年頃は新生入生でも喫煙者が 15% 近くいましたが、徐々に減少して、最近では新生入生では 0.5% 以下、女子はほぼ 0% となり、学生全体の喫煙率も低下傾向であることがお分かりいただけると思います。

しかし、学年ごとの喫煙率を見ると、学年が上がるにつれ（特に 3 年次以降）喫煙率は増加しており、これは最近も同様です。このことは言い方を変えれば、大学生活が、学生を喫煙に導いているとも言えます。保健管理センターで男子喫煙者にアンケートをとって、「喫煙の習慣は誰の影響が大きかったか」と聞くと、「学部の知り合い」「部活・サークルの知り合い」「バイトの知り合い」などと答え、これらを合計すると半数以上になります。

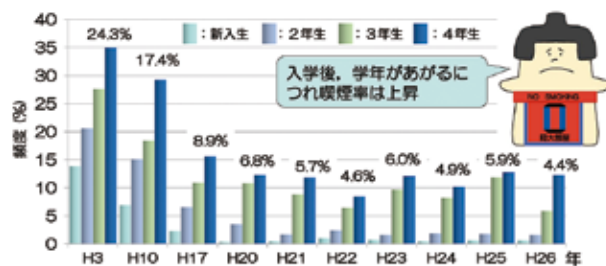


図 1. 岡山大学男子学生の喫煙率の推移

定期健康診断の問診票による調査
数字は年度別男子学生（1～4 年）の平均喫煙率
女子の喫煙率は 1% 未満で最近ではほぼ横ばい

また、喫煙している男子学生に今の気持ちを聞くと、7割以上が「やめたいと思っている」と答えています(図2)。喫煙は、若いときに覚えるほどやめるのが難しくなることがわかっており、タバコの依存性(麻薬のように一度使用するとやめることが困難になること)は非常に強く、医療の世界では「ニコチン依存症」という病名で喫煙者の禁煙治療に当たっています。ほぼ喫煙者が0%に近い新入生に喫煙習慣を身につけさせてはいけません。そのための一つの方法としてタバコの吸えない環境を作り、学生がタバコを覚えないようなキャンパスを作ることが大切だと考えたため、敷地内全面禁煙を選択することとなりました。

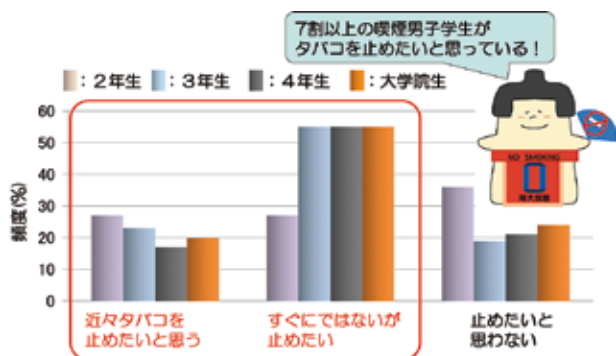


図2. 喫煙男子学生への質問
「今のあなたの気持ちを教えてください」
(H23年度定期健康診断時の問診票より)

喫煙は自分だけの問題ではなく、周囲の人にも受動喫煙という形で健康被害を与えることにもなります。また、「分煙している」と考えていても、知らず知らずのうちに受動喫煙に曝露されていることがあります。図3は、岡山大学職員の受動喫煙の現状を知るために、職員定期健康診断を利用して、非喫煙者に尿中コチニン(ニコチンの代謝産物で、これが高いと受動喫煙をしていることになります)を測定した結果です。非喫煙者481人の測定で24%が陽性(受動喫煙をしている)であり、受動喫煙を自覚していない人のうち、尿中コチニン陽性、つまり、自分では気づかないままに受動喫煙を被っている人が15%もいるということを示しています。

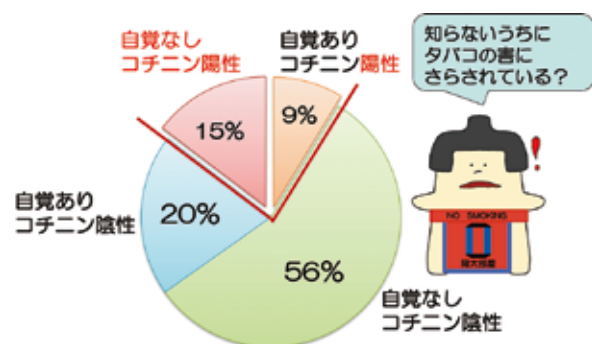


図3. 受動喫煙の自覚と尿中コチニン測定値
非喫煙職員481名の健康診断での調査
(古賀 光 他, 日呼吸誌 2(3), 2013より改変)

● 保健管理センターの願い

私たち保健管理センター職員は、岡山大学に入学し、卒業していく学生のみなさんに「正しい健康観」をもって社会に羽ばたいてほしい、と願っています。学問・教養・技術を身に着けた立派な実践人を社会に輩出するという大学の重要な使命の中に、喫煙習慣のない健康な学生を送り出すことも一つの大切な役割だと考えています。

敷地内全面禁煙は、喫煙者にとっては厳しい環境と思われるかもしれませんが、これは喫煙者、非喫煙者双方の理解と協力がなければ成り立ちません。両者が対立することなく、教育をする場である大学の構成員である私たちは、前途有為の若者であるみなさんの将来を考え、学問や教養のみならず、喫煙についても正しい方向性で、協力・支援していきたいと思います。たとえ喫煙所を設けて分煙しても、職員が喫煙する姿は、学生にとって「喫煙はオッケー」という意識を知らず知らずのうちに植え付けるものではないでしょうか？

禁煙へのサポートは以前から保健管理センターで行なっており、できる限り支援しますのでお気軽にお越しください。また、喫煙による健康障害はよく知っておられると思いますのであえて述べませんが、タバコの有害性や岡山大学の喫煙に関する資料は、保健管理センターホームページを参照いただければと思います。

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/hokekan/jikoboshi/tabako.htm>

みなさんと一緒に、タバコの煙のない健康的で美しい学都岡山を作っていきましょう！どうかよろしくご協力をお願いします。



おしゃれな交流の場・Jテラス

総務・企画部総務課 笠原 秀起

雲のような柔らかい曲線の特徴的な屋根の下、不規則に配された無数の柱が立つ空間、木立の間を散策しているかのような建物…。

岡山大学津島キャンパスに、学生や教職員、地域のみなさんの新たな交流の場として、「Junko Fukutake Terrace」（通称：Jテラス）が誕生し、大変にぎわっています。

福武教育文化振興財団副理事長の福武純子氏の寄付で建設され、設計は、建築家妹島和世さん、西沢立衛さんによるユニット「SANAA（サナア）」が担当しました。

併設のカフェ「J Terrace Café」は、「CAFE Z」（岡山市南区）を展開する酒井プランニング株式会社が運営しています。フランス料理風の総菜を「三段重」に詰め込んだランチやスイーツなど素材にこだわったメニューが充実しています。

本学の卒業生でもある同社代表取締役の酒井政徳さんは「さまざまな出会いや繋がりが生まれる空間にしたい。卒業生の一人として大学に貢献できれば」と話していました。



施設北側



ちょっとおしゃれなランチとスイーツ



留学のすすめ

橋村 直樹

大学院文化科学研究科
博士後期課程 人間社会文化学専攻
(2010年3月修了)
岡山県立美術館 学芸員



私は岡山大学で西洋美術史を学び、現在、岡山県立美術館で学芸員として働いていますが、専門に研究しているのはビザンティン美術史です。ビザンティン美術とは、現在のギリシアやトルコを版図としてかつて存在したビザンティン帝国（東ローマ帝国）で作られた美術のことで、東方キリスト教（正教）の聖堂を飾るモザイク壁画やフレスコ壁画に代表されます。私はギリシアに残るビザンティン聖堂壁画が博士論文のテーマだったことから、2003-04年と2007-08年の二度にわたりアテネ大学に留学しました。ここではギリシア留学中に体験したことの中から特に印象深かったエピソードを紹介したいと思います。

私は最初の留学の際、現代ギリシア語の運用能力を高めるためにアテネ大学付属の語学学校に通っていました。そこには現代ギリシア語を学ぼうとする学生が世界各国から集まるのですが、なぜか私は、中近東出身のイスラム教徒が大多数を占めるクラスに入ることになりました。中近東出身のクラスメートはお互いにアラビア語で会話することができ、また10代後半の若者が多かったこともあって授業中いつも騒がしく、語学教師をたびたび困らせていました。私は正教の美術を研究しているということもあり、二人の正教徒のクラスメートと友達になりました。ある日、その二人の友人と談笑していると、一人のイスラム教徒のクラスメートが近づいてきて「君たちは何のために生きているのか」という質問

をしてきました。いつも授業の邪魔をして幼稚だなあと思っていたクラスメートから突然そのような人生論的な問いが寄せられたことに私は驚き、どう返答しようかと戸惑っていたところ、二人の正教徒の友人は「神のため」と即答したのです。質問したクラスメートはその答えを聞いて満足そうな顔で「ほくも神のためだ」と言いました。イスラム教も正教も一神教であり、それを信じる彼らにとって「神のために生きる」というのは当然のことだったのです。しかし、私にはその考えは思い浮かびませんでした。おそらく日本人の多くは、「自分のため」とか「家族のため」とか考えるのではないのでしょうか。私はクラスメートとのその問答を通じて、一神教を信じる人々の心性が日本人のそれとは決定的に異なることを実感したのでした。

留学生活は、最初は言葉が通じなかったり、日本では当たり前のことがそうではなかったり、宗教的背景の違いによる考えの相違に驚いたり、往々にして予測できない様々な出来事に直面するものです。そうした体験を通じて、世界には多種多様な価値観があることを理解し、複眼的な思考ができるようになるのだと思います。「世界を見据え、世界に通用する人材を育成していく」というヴィジョンを掲げる岡山大学に在学する（将来在学するかもしれない）みなさんも、世界に飛び出して自分だけの貴重な体験をしてもらいたいと思います。

岡山大学を卒業された方に、
本学在学生の方達へのメッセージをお願いしました。
みなさんの大学生活に役立てていただければと願っています。

自分の未来考えつつ、 充実した毎日を

近藤 彩和子

法学部法学科（2011年3月卒業）
日本銀行岡山支店 総務課



みなさん、こんにちは。私は2011年3月に岡山大学法学部を卒業し、現在日本銀行岡山支店で仕事をしています。

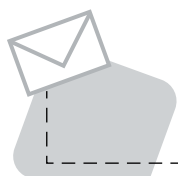
学生時代はゼミ、サークルにアルバイトと様々な人に出会い活動する中で、コミュニケーションの取り方など、現在の仕事に活かしていると思う経験をたくさんしました。また卒業後も定期的に会って、悩みや相談に乗ってもらえる友人に巡り合えたのも私の財産だと思います。

就職活動を始めるにあたって、金融機関を志望することを決めたのち、一番悩んだのが働く場所です。生まれも育ちも岡山の私は、岡山を出て仕事することに憧れ、実際県外での就職活動もしましたが、悩んだ末、支店採用の転勤のない職種で受けた日本銀行に就職を決めました。女性として生まれたからには、結婚をして出産もしたい。でも自分の仕事も続けたい。欲張りな考えを現実にするには、両親の協力も得られる地元就職が必須だと考えたのです。日本銀行には、結婚出産を経て活躍されておられる先輩方がたくさんおられます。先の長い人生、どうなるか私にも分かりませんが、一生懸命取り組んだ就職活動は良い経験となりました。みなさんも就職活動をする時は自分の軸を決めて、全力で取り組んでください。

日本銀行では、現在は広報担当として勤務しています。広報の仕事では、日本銀行の仕事内容をみなさんに知っていただくために、親しみやすさ、分か

りやすさが大切です。夏休み親子見学会を企画したり、個人や団体の希望に応じて店内見学を開催したりする際には、参加者によって説明を変える工夫をしています。また県民のみなさんに金融・経済の知識をつけていただくために活動している岡山県金融広報委員会の仕事もしています。この委員会は日本銀行岡山支店が事務局を務めていて、講演会やセミナーを企画し勉強の場を提供したり、勉強したいと思っている学生さんや地域の方々の学習支援をしたりしています。関係機関、地域の方々と関わりながら行なっていく広報の仕事に私はとてもやりがいを感じています。これから社会に出て活躍されるみなさんのような若い層への働きかけが重要だと感じていますので、今後も引き続き努力していきたいと思っています。

大学の4年間はあっという間です。勉学に励むのはもちろん、自由な時間を使って多くの経験をし、いろんなことを考えて欲しいと思います。楽しい時間はすぐに過ぎてしまって、突然自分の将来の選択を迫られる時が来ます。自分はどんなことに興味があるだろう、自分には何ができるだろう。自分の未来を考えながら、ぜひ充実した大学生活を送ってください。



海外の大学紹介

海外に学び、それから働いて学んだ二十年

大学院社会文化科学研究科（文学部）准教授

田中 秀和

日本を出て海外へ

私は普通の日本人なのですが、二十余年に渡りカナダ、アメリカ、イギリスの大学を渡り歩きました。その経歴を辿って、渡り歩いた大学を紹介します。

日本で学部生だった時に理論言語学に出会いました。理論言語学は、我々が話す言語を仮説を立てて研究していく学問です。それまで言語をそんな視点から研究できるなんて想像さえしていませんでした。少し勉強してみようかと考え、猛暑の夏に言語学者チョムスキーの書いた本を毎日ページ数を決めて読むのですが、読めば読むほど分からない。作戦を変えて、入門書から読み進めることにしました。それはある程度理解できたのですが、それでどうやったら「研究」というものができるのかは分からない。それでもせっかくやったのに勿体無いと思い、修士課程に進み、それが終わる頃、学会発表や学術誌への論文出版も決まり、調子に乗って海外の博士課程に行くことにしました。

マッギル大学

幸いにも研究助手の仕事をいただき、カナダ、モントリオールにあるマッギル大学に留学したのが1993年のことです。マッギルは1821年創立、モントリオールの繁華街に面し、繁華街から見て大学の裏手にはモンロワイヤル公園という半田山くらいの規模の山を整備した公園があり、私はよく、その山にジョギング、散歩、自転車乗りに行きました。春は山から溶け出した雪で大学は洪水になります。夏の間、街では国際映画祭を始め、ジャズフェスティバル、毎週の花火や自転車競技などたくさんの催し

があります。いわゆる、メープル街道沿いにあり、秋の楓の紅葉は息をのむような美しさでした。冬の寒さが厳しく、またサンローラン川の中州にあるため風が強く体感温度も下がり、氷点下30度を下回ることも頻繁で長い時間外にいると生命の危険があります。博士課程も終わる頃、拙論が幾つか学術誌に載り、そこでまた欲が出て、「海外の大学で職を得て、海外で戦っていこう」なんて考えるようになりました。まだ若かった。

西のブリティッシュコロンビア大学へ

まずカナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学で職を得ました。最初のフルタイム教員としての授業は非常に緊張して、何時間もかけて準備して授業に臨んでも30分くらいで話し終わっちゃう。新米教師として試行錯誤を繰り返していました。

バンクーバーは山と海とが織りなす美しい街です。大学は半島の先端にありカナダ西部では最大の大学になっています。アジアの影響が大きく、学生は中国人が多かったです。バンクーバーの夏の快適さは筆舌にし難い。初夏に向かう頃なら、朝から残雪の山をスキーで滑って、午後には街に戻りビーチで寝そべるなんてことも（ちょっと肌寒いのを我慢すれば）できます。

アメリカ進出

バンクーバーで一年過ごした後、アメリカの中西部、ミネソタ大学に移りました。ミネソタ大学はアメリカでも屈指のマンモス大学です。

アメリカはニューヨーク以外、車社会で、どこに行くのも車が基本ですが、私はアパートからバスで仕事に行くことが多かったです。一度、冬の寒い夜の夜、バスを待たなくてはならなくて、氷点下30度の中、バスを20分ほど待ちました。バス停に居合わせた三人で3分交代くらいで一人がバス停で待ち、二人は寒風が直接あたらないよう物陰に隠れているという共同作業をしました。



ミネソタには沢山の湖があります。厳寒期に湖は氷りつきます。背景の雪原は凍った湖です

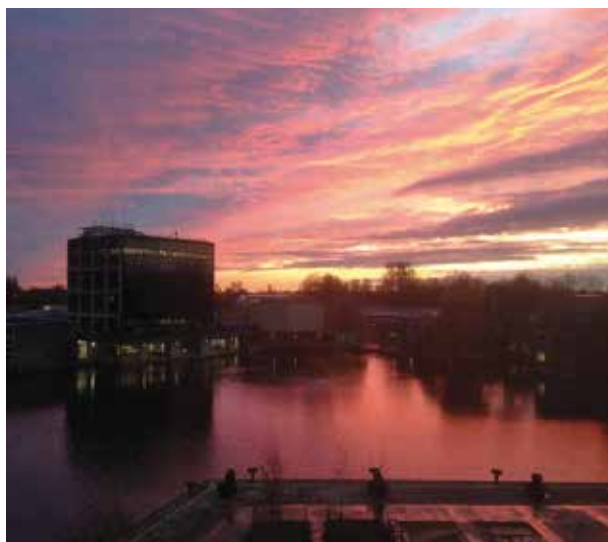
イギリスへ

ミネソタの後、イギリスのヨーク大学に転職しました。2003年の夏のことでした。ヨークは歴史ある建物だらけで、ハリーポッターの映画の街並みのモデルになっているところもあります。大学はつい最近50周年を迎えたばかりで、比較的新しい部類です。



ヨークの街で上に行くほどせり出している不思議な建物

ヨーク大学は街の中心部から徒歩だと40分ほどかかる郊外にあり、中心に湖を据え湖を囲んでカレッジが立ち並んでいます。湖には白鳥、黒鳥をはじめとして多くの水鳥がいます。

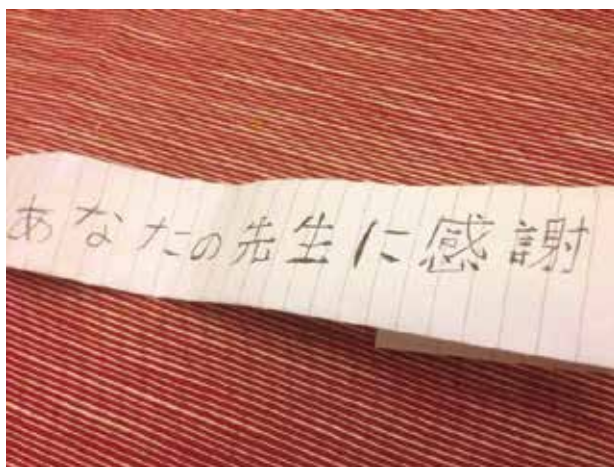


イギリスといえば雨。雨の後の夕焼けはとても美しかった

着任したての2003年、ヨーク大学は小さな大学でした。私が所属した言語学科も教員が8人くらいだったと記憶しています。言語学科の毎年の新入生も30人くらい。それが今では40人ほどの教員、新入生も年に150人を超えます。大学全体も医学部まで開設し、元々のキャンパスの東側に新しいキャンパスを増やし、倍近い規模になりました。

引っ越したばかりの頃、スーパーなどのお店が夕方5時には閉まってしまうのには困りました。日曜日も定休なので、仕事をしていると土曜日くらいしか買い物の時がない。私が滞在中に急激に24時間営業のスーパーができてきました。

イギリスには結局、ほぼ11年いました。最後の方は日本への帰省が楽しみでした。歳を取ってくると故国の土地が呼んでいるといいますか、望郷の念が湧いてきます。特に東日本大震災以降はいつも日本のことを思っていました。そんな折、岡山大学の仕事の話をいただき、人生の転換期だと思い岡山に来ました。



ヨーク大学で最後の授業後、学生が紙に書いてくれました。
授業中にインターネットで翻訳したものらしい

住まないにしても世界を相手に仕事ができる人、いざとなったら海外でも仕事ができる人だと思います。私の海外経験がこうした目標に役立つことを願って仕事をしています。

比べてみると

そんなわけで、カナダ、アメリカ、イギリスで四つの大学を経験してきました。印象としてはイギリスの学生はカナダ、アメリカの学生に比べるとおしとやかで、なかなか自分の意見をはっきり言いません。授業しやすいのはイギリスですが、反応がないのもちょっと心配になります。岡山大学の学生さんはイギリスタイプで物静かですが、研究室に来ると活発に話をします。岡山大学で教えていて思うのは、文学部生でも数学的な思考法ができるのだ、ということです。イギリスで言語学の問題を数学になぞらえて説明すると必ず「数学やりたくないから言語学科に来たのに」と文句を言われたものです。

海外に住み、現地で働くということ

日本に戻ってきたときは浦島太郎状態でした。そのため、21年前の日本と今の日本の違いがはっきりとわかります。昔は欧米文明に対する憧れとその裏返しであるコンプレックスがありました。今の若者にはそんなことはない気がします。若い人は和風を好み、日本人であることを誇りに思っています。これはこれで素晴らしいことです。

岡山大学も昨今のグローバル化の波に乗り遅れまいと、事あるごとに「グローバル」という単語を出してきます。「グローバル人材」というのは外国に

編集後記

岡山大学の教育環境は、現在大きな変革の時に直面しています。スーパーグローバル大学、60分授業、クォーター制、それに伴うキャンパス整備や大学の組織再編など、わずか数年の間に急激に様変わりしていく中で、我々はこれからどのような「学び」を意識していく必要があるのでしょうか。

今号では、岡山大学の教育環境の変化に関連する話題を中心に編集いたしました。紹介されている各取組みは、記事作成時点でもまだ進行中のものが多く、今後さらに内容が変化していく可能性もあります。それでも、岡山大学が教育に対して今まさにどのような方向へ向かおうとしているのか、どのような「学び」が求められていくのかを感じとっていただければと思っています。

OU-Voiceへのご意見はもちろん、岡山大学の「学び」についても、ぜひ忌憚ないご意見をお寄せいただければ幸いです。

教育開発センター 准教授 長瀧 寛之

編集担当

教育開発センター広報専門委員会

久保田 聡、橋ヶ谷 佳正、紀和 利彦、矢野 正昭、長瀧 寛之、堀内 孝、加来田 博貴、八木 隆徳

表紙図案構成監修

橋ヶ谷 佳正

学務部学務企画課

バックナンバー

- No. 1 特集：「新カリキュラム・教務システムについて」
- No. 2 特集：「上限制」
- No. 3 特集：「授業評価アンケート」
- No. 4 特集：「外国語教育の在り方」
- No. 5 特集：「望ましい授業とは」
- No. 6 特集：「成績評価の在り方」
- No. 7 特集：「教養教育に求めること」
- No. 8 特色G P 紹介、学生・教職員教育改善委員会活動報告 他
- No. 9 新しくなる教養英語教育、現代G P 紹介 他
- No.10 20年度入学生から始まる GPA 制度、特集：「大学ではこう学ぶ」 他
- No.11 学生支援の立場から見た教養教育、特集：「使ってみよう岡大 e-ラーニング」 他
- No.12 アドミッションセンターの活動、特集「大学ではこう学ぶ」 他
- No.13 社会にはばたく岡大生のためのキャリア開発センターを目指して、特集「学士課程教育構築」 他
- No.14 世界を舞台に活躍していく岡大生のために一国際センターの役割一、特集：岡山大学の外国語カフェ 他
- No.15 岡山のまちと共に「学都」をめざす一地域総合研究センターとは？一、特集「学士課程教育の構築」 他
- No.16 「研究大学強化推進事業」に採択！世界で研究の量、質共に存在感を示す岡山大学「リサーチ・ユニバーシティ：岡山大学」を目指して 他

上記は、OU-Voice ホームページよりご覧いただけます。

<http://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/ou.html>

OKAYAMA UNIVERSITY



OKAYAMA UNIVERSITY

岡山大学 教育MAGAZINE OU-Voice 第17号

編集・発行

岡山大学教育開発センター 広報専門委員会

所在地・連絡先

岡山市北区津島中2-1-1 〒700-8530

電話：086-252-1111(代表) Fax：086-251-8440

E-mail：gkikaku@adm.okayama-u.ac.jp